

説教余滴 2019年3月31日、「日欧風俗の違い」、

1970年前後には、日本とはどんな国か、或いは日本人とは、を問うことが多く、そうした書物が多く出版されました。有名なイザヤ・ベンダサンもその一人。多くの人が、同主題で論文を発表し、良く売れました。読まれたのでしょうか。解りません。イザヤ・ベンダサンの正体、実は山本書店主・評論家である山本七平さんと言われます。この方は、青山学院の出身で、個性的なダンディでした。そのダンディズムが、実名を隠して、所論を発表させたのではないか、と感じました。

この当時、多くの発表は、日本と欧米の比較研究でした。当然、日本人論の形になります。以前からあったことですが、東西の文化、風俗、習慣を比較して、こんなこともこのように違っている。そして、それだから、と評定することが多かったように記憶します。こうした論考は、学級的な姿勢をとれば、一つの淵源・ルーツに辿り着くと言われました。それが、『フロイスの日本覚書』です。原著は、戦国時代の日本に30余年滞在したイエズス会宣教師ルイス・フロイスの書いた報告書である。これは本来、後続の宣教師のガイダンスとして書かれたものようです。事前に勉強しておけば、異なる生活様式に戸惑うこと少なく、順応できる、と期待したものでしょう。残念ながら、冗長である、と判断され少数が出版されましたが、原著はマドリードの王立歴史学士院図書館の棚に収められ、ほこりをかぶっていました。

これを見出し、光を当てたのはローマ・イエズス会史学研究所所員として輝かしい業績を残したヨゼフ・フランツ・シュッテ師でした。1946年秋、このレポートを知り、高く評価し、印刷・刊行を決意されました。多くの検証を経て、1955年、この文書の原文（ポルトガル語）とドイツ語訳文を刊行しました。